

大阪史編纂所だまり

大阪市史編纂所（発行）
〒550-0014 大阪市西区北堀江 4-3-2

第57号

大阪市史料調査会（編集）
大阪市立中央図書館内 TEL06-6539-3333

◆1920年代の病気の罹患事例— スペイン・インフルエンザ —◆

日本で新型コロナウイルスが猛威を振るい始めて、約1年半が経ちました。終息の兆しが見えず不安な日々が続くなかで、感染症の歴史を学ぼうとする動きが全国的にみられます。感染症の歴史をテーマとした博物館の特別展、テレビ特集、本をよく見かけるようになりました。とりわけスペイン・インフルエンザは頻繁に取り上げられており、大阪市史編纂所でも企画展示「史料にみるスペイン・インフルエンザの大流行」（本年2～3月）と講演会「スペイン・インフルエンザの大流行と大阪」（3月）を開催しました。今回は、『大阪府方面委員事業年報』を素材に、大阪におけるスペイン・インフルエンザ罹患者の具体的な状況がわかる事例を紹介します。

方面委員は、1918（大正7）年の米騒動をきっかけに大阪府で創設されました。これは、大阪市内と隣接町村のうち、米騒動のような暴動が起りかねない、とみられた地域に「方面」を設置し、各方面に十数名以上の委員を任命して社会調査とケースワークを実施させることで、生活困窮者への対策を打ったものでした。

1919（大正8）年以降、毎年刊行された『大阪府方面委員事業年報』には、毎月開催された常務委員連合会の議事録が収録されています。連合会では、各方面に1名置かれた常務委員と、府・市の社会課員、警察署員が参集し、活動のなかで生じた問題に関する議論や、各方面の活動事例報告を行いました。この活動事例報告のうち、スペイン・インフルエンザの罹患事例をいくつか見てみましょう。なお、日本でスペイン・インフルエンザが流行した時期は、「前流行」（1918年10月～19年5月）と「後流行」（1919年12月～20年5月）でした。

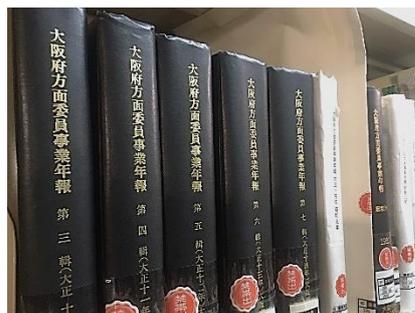


写真 『大阪府方面委員事業年報』
（大阪市立中央図書館蔵）

【事例1】1919（大正8）年9月、恵美第一方面報告

鶴吉(66)は糊の行商で1日40銭程の利益を得てようやく生活しているが、四男・竹四郎が1918（大正7）年11月に流行性感冒に罹り、鶴吉宅の2階で寝たきりになっていた。生活が苦しく、竹四郎を「医師にもかけず打棄てゝ」あったので、方面委員が医療を斡旋したところ、働ける程に回復した。

【事例2】1922（大正11）年2月、西野田第二方面報告

「ある女」は1918（大正7）年に憲兵下士の夫を流行性感冒で亡くした。5人の子を連れて保母をやっていたが、女手一つでは生活できないため、長男と次男以外は縁故の人に託した。行き詰まった「女」は長男を師範学校に行かせてやりたい、と方面委員に救助を申し出て来た。

「前流行」期に罹患した事例です。【事例1】の罹患者は、経済的な理由で受診できないまま寝たきりになっています。しかし、家族は生活のために働かなければならないので、罹患者を自宅に「打棄て」ざるを得なかったようです。【事例2】は世帯主が罹患・死亡したことで、妻子の生活が行き詰まって

しまった事例です。感染症は罹患者本人だけでなく、その家族の生活（場合によっては生命）も脅かすものだったのです。

【事例3】 1920（大正9）年2月、天王寺第四方面報告

大工職の勝〇〇(41)は妻(33)と長女(7)・長男(4)・次男(2)と暮らしていたが、一家で流行性感冒に罹り、方面委員が家を訪ねるとお茶を汲む者が1人もいないほど悲惨な状況だった。薬を取りに行くこともできず、流行性の病気のため看病に来てくれる知人もいなかった。方面委員が見舞っていたが、不幸にも勝〇〇と長男は死んでしまい、残ったのは3人となった。

「後流行」期に罹患した事例です。**【事例1・2】**のように家族の誰かではなく、全員が罹患しています。幼い子3人も含めて重症化しており、5人のうち2人が死亡した点は注目すべきでしょう。スペイン・インフルエンザウイルスは流行ごとに変異し、致死率が高くなったと考えられています。また、感染症であるため看病に来る者もない、といった絶望的な状況も読み取れます。

【事例4】 1922（大正11）年3月、鷺洲町方面報告

浅田某は、元人力車夫の音松（72）に12年来、2階を貸している。音松は酒を好み、素行が良くない上に貯金も無く、6年前に車夫を辞めてからは日稼ぎで生活していた。1922（大正11）年1月、音松は流行性感冒に罹り、浅田一家が親身に看病したが死んでしまった。浅田が40円を出して葬儀を営んだ。近隣から香典として6円30銭が集まり、方面委員からも葬儀補助費として9円を支出した。

流行終息後に罹患した事例です。罹患者が高齢であることも関係すると思われませんが、終息後もスペイン・インフルエンザで死亡する人がいたことがわかります。また、独身の罹患事例ですが、貸主一家が親身に看病しており、その意味で、看病に来る知人がいなかった**【事例3】**とは対照的と言えます。必ずしも感染症罹患者を忌避するだけではない、大阪の「下層社会」のあり方が読み取れます。

感染症罹患者は、重症で動けない、医療費が払えない、病床が足りない、などの理由で「患者」（医者の治療を受ける人）にすらなれないことがあります。100年前も、現在も、自宅療養を余儀なくされている罹患者とその家族がいるのです。私たちは、この重い歴史と現実をしっかりと認識しておかなければなりません。

（井ノ元 ほのか）

◆「天狗」になったペリー◆

1853（嘉永6）年、浦賀沖（現横須賀市）にあらわれた巨大なアメリカの蒸気船。「黒船」といわれた軍艦を率いたマシュー・ペリー（1794-1858、写真1）は、日本で最も有名な外国人のひとりです。「たった四盃で夜も寝られず」とうたわれた「ペリー来航」は、多くの日本人に驚きと脅威をもって迎えられ、その情報は、書状や聞き書き・瓦版（当時のニュース情報紙）などにより全国へ流布していきました。

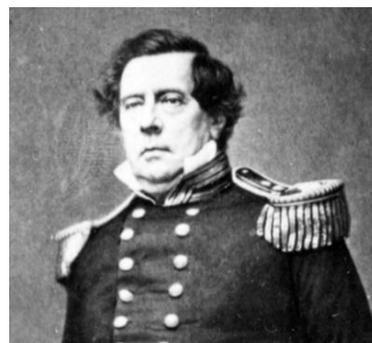


写真1 ペリー

描かれたペリー なかでも、ペリーら使節団の姿を伝える肖像画は、人びとの関心を最も強く集めたアイテムのひとつでした。写真2は、米穀商と思われる大坂の町人が所蔵したペリーの姿（嘉永7年3月写）です。「北亜墨理伽共化（和）政治州之使節ペルリ之真像 白髪交り 年齢凡六十歳計 手ニ金ノ輪三ツ入」とあります。首までひげに覆われ、つり上がった目は鬼の形相。軍服は、肩章や金ボタンだけが強調されて、柄が入った中国風衣装に変わっています。このような様相の絵は、俗に「天狗ペリー」といわれています。なぜこのような姿になったのでしょうか。

ペリーが日本人によって初めて描かれたのは、2度目の来日となった1854（嘉永7）年でした。幕府側の応接団に付き従った絵師数名が、実際に饗応の場で彼をスケッチしています。このとき描かれた絵は、高度な正確さを保ったまま、情報活動を行う大名たちに広まっていきました。

モノいう似顔絵 いっぽう、市井では、本人とは似ても似つかない顔貌の絵が大量に出回りました。人びとの好奇心を満足させる最も有効な手段は、インパクト。鼻は長く眼は大きく、眉毛も太く、髭をはやす。自分たちとは異なる部分を誇張することで「異人」像が作られていきました。サーベルが刀に変わ

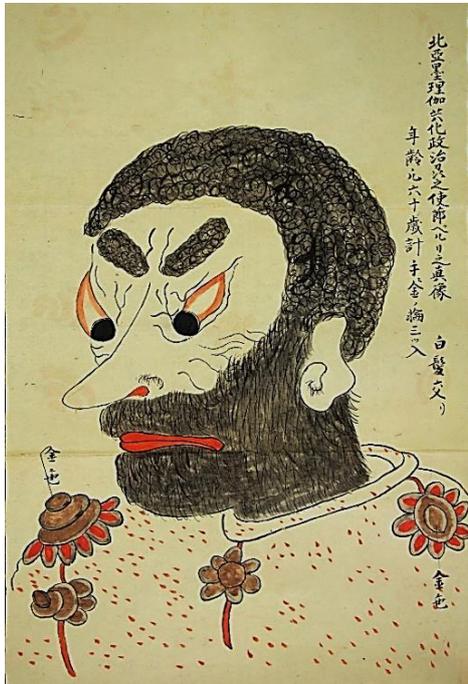


写真2 「ペリリ之真像」
浅田家文書「亜墨理伽真像写 二人絵姿」
より（大阪市史編纂所蔵）

わり、服が中国風に変わり、ついには古代中国の武将・関羽風になったものもあります。一般によく知られる、目じりの下がった「西郷隆盛似」の絵は、実は出島のオランダ人像をそっくり模写したものでした。そこに「ペリー」と明示さえすれば、人びとに受け入れられたのです。

さらに、変容した絵をより際立たせて、主義主張の表現に利用したものも現れました。ペリーが来日中に結ばれた日米和親条約以降から登場しはじめた「天狗ペリー」は、より野蛮さを強調した風貌に。なかには攘夷的な意味の狂歌が記されているものもあることから、外国排斥を主張するため意図的に流布させたのではないかとされています。またこの類のものは、口を開けた姿の使節団副将・アダムスと対のものが多く（写真2史料も同様）、あたかも魔を祓う仁王像や狛犬（阿・吽）のごとき念の入れようです。

その他にも、人形浄瑠璃や歌舞伎・読本のパロディなど、多くの絵画に登場したペリー。激動する幕末、「幕府存亡の危機」も、泰平の世の庶民にとっては格好の「眠気覚まし」だったのかもしれない。（白杉 一葉）

◆安政南海地震と大坂◆

ゆらゆらの時代 幕末期の日本は、ペリー率いる黒船の来航をきっかけに、江戸幕府が主導する政治体制が明確に揺らぎ始めます。ちょうどそのころ、足もとの日本列島もまた大きく揺らいでいました。

嘉永7年11月4日（西暦1854年12月23日）の午前9時ころ、安政東海地震が発生し、東海地方を中心に大きな被害が出ました。その32時間後の5日午後4時ころ、こんどは安政南海地震が発生し、西日本を中心に大きな被害をもたらしました。この2件の地震は、日本列島のすぐ東側にある南海トラフを震源とする南海トラフ巨大地震です。大きな津波が太平洋沿岸部を中心に襲い、多くの死者が発生しました。さらに翌安政2年10月2日、直下型地震が江戸を直撃しました。安政江戸地震です。

以上3つの連続する大地震を安政地震と称します。当時の狂歌に「太平の世を大変にゆりかえし上もゆらゆら下もゆらゆら」とあるように、政治と大地が揺れ動く、まさに動乱を予感させる時代でした。

大坂の被害 安政南海地震では、大坂も地震と津波により被災しました。道修町の外科医岩永文禎は、被災当時の大坂の状況について、日記『鍾奇斎日々雑記』に以下のように記しています。

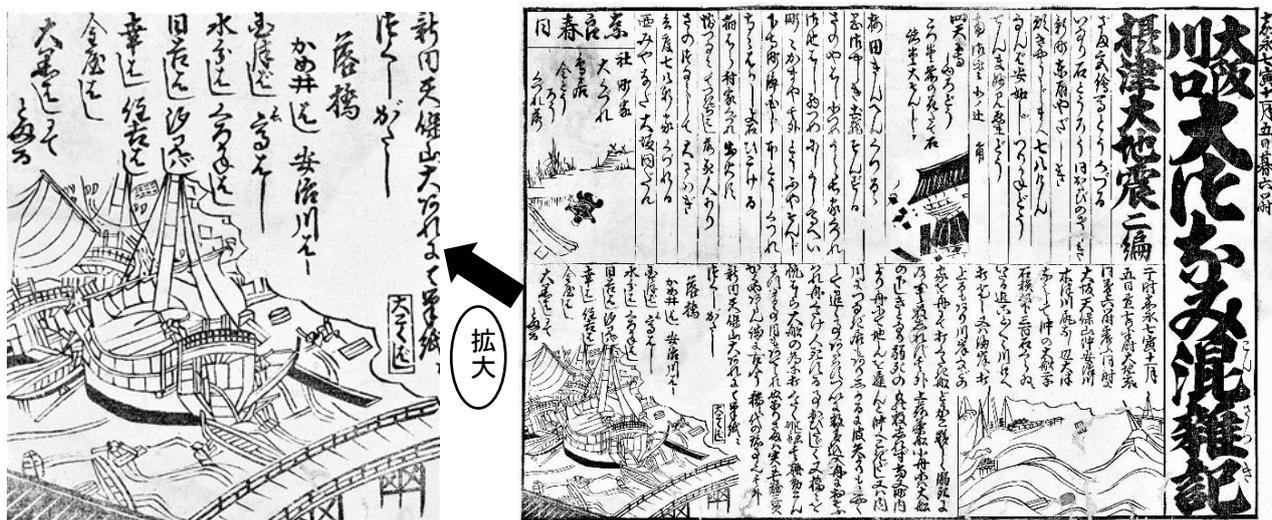
仰山なる大船破船なり、金屋はし（橋）往来ならず、大黒橋にて大船留まる、それより西ハ幸橋辺迄、ひしひし大船いやか上に乗あり、誠に目も当てられぬ次第なり、木津川筋天神御旅所前迄大船来る、亀井はし（橋）落る、それより道頓堀の船番所迄、ひしと大船いやか上に破船す、大略千二百許もあるべし（『大阪編年史』第22巻所収。原本は大阪市立中央図書館所蔵）

地震発生の翌々日、文禎は、多くの大船が津波により堀川（水路）へ押し流され、堀川に架かる橋を

落とし、折り重なって川面を埋めるさまを目にしました。

当時の大坂は堀川がよく発達しており、茶船や上荷船などの川船が行きかい、大量の物資を市内に供給しました。地震に恐怖した人々の一部は、水の上なら大丈夫と考え、この身近な堀川に浮かぶ川船に避難しました。ところが津波により、木津川や安治川の河口付近に碇泊する大船が押し流され、道頓堀や長堀などの堀川に入り込み、避難民を乗せた川船を粉碎しながら遡上してきたのです。

瓦版「大阪川口大つなみ混雑記」(大阪市史編纂所蔵)。



*大阪市立中央図書館所蔵のものは、同館ホームページの「大阪市立図書館デジタルアーカイブ」で閲覧できます。

大坂三郷分の被害報告によると、地震による死者2人・潰家83軒、津波による死者(溺死人)273人・落橋10ヶ所、船の損失は廻船1121艘・川船722艘。地震よりも津波による被害が大きいことがわかります。市街地はさして浸水していないようですので、やはり堀川における被害が注目されます。「水都」大坂ならではの被災状況といえるでしょう。

南海トラフ巨大地震は、およそ100~150年周期で発生しています。現在の私たちは疫病のことで頭が一杯になりがちですが、いずれ必ずやってくる大地震への覚悟と備えも常に必要でしょう。

(中村 直人)

刊行物のお求め方法

大阪市史編纂所の刊行物は、大阪市史料調査会で窓口・通信販売を行っています。また、下記の書店でお求めいただけます。詳しくは大阪市史料調査会(大阪市立中央図書館3階・大阪市史編纂所内 Tel.06-6539-3333)までお問い合わせください。

取り扱い書店—— ジュンク堂書店(大阪本店・難波店)
紀伊國屋書店(梅田本店 ※『大阪の歴史』最新刊のみ)

■「編纂所だより」は、年2回発行しています。

さまざまな歴史の話題や日々の活動などを、みなさんにわかりやすくお届けする、ニュースレターです。大阪市立各図書館のほか、各区役所、各区民センター、市役所市民情報プラザ、総合生涯学習センター及び各市民学習センター、大阪歴史博物館、大阪城天守閣、住まいのミュージアムなどに置いています。大阪市立中央図書館(3階大阪コーナー)及び各区の図書館では最新号を常備していますので、カウンターでおたずねください。

■大阪市史編纂所では、ホームページを開設しています。

催し物や刊行物のご紹介をはじめ、今日、大阪でどんな出来事があったかを知る「今日は何の日」、全国の図書館に寄せられた「おおさか」に関する質問にお答えする「みんなの質問」など、市域の歴史に関する情報を発信しています。

「編纂所だより」もカラー版で閲覧・ダウンロードしていただけます。ぜひ、ご覧ください!

https://www.oml.city.osaka.lg.jp/?page_id=871 または「大阪市史」で検索してください。

(令和3年10月発行)